



《建造物のミニチュア》中米マヤ低地AD650-850年 M2906

木村定三コレクション中南米考古目録

凡例

- ・本目録は、愛知県美術館に寄贈された木村定三コレクションのうち、中南米考古の資料を掲載し、解説を付したものである。
- ・各資料名は調査者の見解を勘案して決定した。
- ・各資料のデータは、掲載番号、資料名称、年代、寸法 (cm)、重量、産地、コレクション番号、受入時名称の順に記した。
- ・作品解説は、杓谷茂樹（公立小松大学教授）が執筆した。

1. 人物型土製品

BC300-AD300

メキシコ コリマ地方

M2412 (メキシコ 土偶)

メキシコ西部のコリマ地方、ハリスコ地方、ナヤリ地方などでは紀元前から多くの人物型土製品が作られていた。人物型のベースを形成したあとで、身体や装束などのパーツを貼り付けていく技法で作られており、共通する特徴として、面長で鼻が高く尖っており、目と口はコーヒー豆様の形をしている点である。また両肩に小さな円形のパーツを複数配しているものも多くあり、これはヒスイなどの石の飾りを表しているものと考えられる。

- 1) 女性像。アクセサリーは帽子、首飾り、腕輪のみのシンプルな人物像。16.7×8.7×2.6、119g
- 2) 女性像。アクセサリーは帽子のみだが、下半身に模様が見られ、入れ墨の表現と思われる。21.9×8.5×3.5、258g
- 3) 男性像。帽子や首飾りの他、胴回りや腕に装束を着けており、装束には黒い着色のあとが見られる。15.6×11.1×3.3、225g
- 4) 女性像。両肩に円形のパーツがつけられている。髪を束ねることなく、長く垂らしている。10.3×7.6×6.2、138g
- 5) 犬を抱いた女性像。乳房の表現から女性と判断できる。両肩には丸いパーツが複数配されている。古代メキシコにはショロイツクイントリと呼ばれるヘアレス種の犬が存在しており、愛玩用に飼われていたほか、食用にされることもあった。11.6×9.7×8.2、168g
- 6) 男性像。帽子、耳飾り、首飾りをつけており、ふんどしと思われる衣装は線刻で描かれている。16.9×9.6×3.0、197g
- 7) 男性像。帽子、耳飾り、首飾りをつけており、ふんどしと思われる衣装は線刻で描かれている。17.5×8.6×2.5、216g



2. 擬人化したイヌ型土製品

AD600-900

11.8×7.2×6.5

192g

メキシコ ベラクルス地方

M2413 (仮面を持つ犬の土偶)

擬人化したイヌの像。古典期後期（AD600-900）にメキシコ湾岸のベラクルス地方で栄えたタヒン文化の土偶と思われる。メキシコ湾岸地方では原産のヘアレス種のイヌの土偶が数多く作られているが、擬人化されたものは珍しい。母子を描いたものと思われ、抱かれているのもイヌの赤ん坊である。中空で振ると音がする。全体的に漆喰が塗られており、痕跡は残っていないものの、彩色されていた可能性がある。



3. 人物型土製品

AD0-400

17.5×10.4×6.0

436g

メキシコ西部地域 ナヤリ地方？

M2414 (赤陶人像)

赤陶人物像（性別は不明）。頭部の形状から、古典期前期（AD0-400）にコリマ、ハリスコ、ナヤリなどメキシコ西部地方で作られた土偶と思われる。アクセサリーなどのないシンプルな形状で、頭髪のみ線刻で描かれている。中空になっており、頭の上部に穴が空いているので、器あるいは笛として使われていたと考えられる。



4. 仮面型石製品

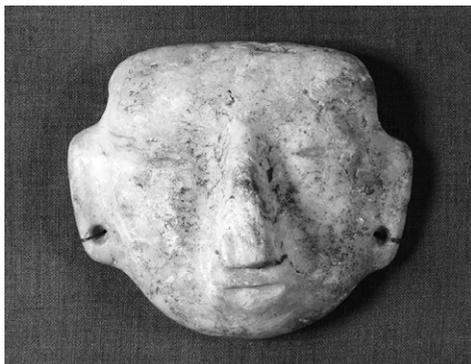
AD450-650

9.8×11.6×3.9

メキシコ中央高原 テオティワカン文化

M2415 (大理石童子面)

アラバスター製仮面。このような石製の仮面は紀元前のオルメカ文化の流れを受け、古典期前期のテオティワカン文化において盛んに作られている。使用法については、両耳の穴にひもを通し、頭飾りあるいは胸飾りとして装着したと考えられる。両文化の一般的な仮面と本品を比較すると、彫刻には稚拙さが見られ、目や口は小さく、一方で鼻の形状は細くて高いという違いが見られる。このことから、テオティワカンの周辺で、模倣する形で作られた可能性がある。



5. 仮面型石製品

BC900-400

14.2×11.7×4.5

726g

メキシコ湾岸地方 オルメカ文化

M2418 (石面(黒色)台付)

ヒスイ製仮面。オルメカ文化は紀元前1200年頃より紀元前後にかけてメキシコ湾岸地帯を中心に栄え、メソアメリカ地域全体に影響を及ぼした「母なる文化」である。オルメカ文化については、ヒスイの仮面の他に巨石人頭像なども有名だが、いずれもベビーフェイスと呼ばれる幅広い鼻と分厚い唇を持った顔の表現に特徴がある。ヒスイなどの緑の石は、メソアメリカ文明においては、超自然の力を宿すものとして重要な役割を果たしてきており、しばしばジャガーの要素を取り込んだ仮面などの彫刻がこの石を使って作られた。



6. 仮面型石製品

BC300-AD300

10.7×11.0×5.7

704g

メキシコ西部地域 コリマ地方？

M2419 (石製人面台付き)

メキシコ西部のコリマ、ハリスコ、ナヤリ地方では、貴重な石に目と口の部分だけ突き技法 (Pecking Technique) により彫り込んだシンプルな仮面型石製品が作られた。これにはオルメカなどメキシコ中央の文化の影響は見られない。このタイプの石製品では、上部にヒモを通すための穴が穿たれているものも多いが、本品にはそれがなく、貴重品として大切に保管されたものと考えられる。



7. オウム型土偶

BC200-AD200

8.8×6.2×12.3

177g

メキシコ、オアハカ地域 モンテアルバン？

M2420 (鸚鵡)

オウムを象った土偶。中空でくちばしをはさんで2つのすき間が空いており、一方で下部に直径1cmほどの穴が空いていることから、オカリナのような複数の音階を出せる笛として使われていたことが推測される。表面には漆喰のあとが前面に残っており、痕跡は見られないものの彩色がなされていた可能性がある。オウムはメソアメリカ南部から中米にかけての温暖な低地地域に生息しており、古代より土器や石彫のモチーフとしてしばしば描かれてきた。



8. 人物座像

BC200-AD200

21.5×11.9×10.3

676g

メキシコ、ハリスコ州

M2421 (メキシコ メキシコ中央高原 人物坐像)

赤陶人物像（男性）。頭部の形状から、先古典期後期（AD200-AD200）に現在のメキシコ西部ハリスコ州で作られた土偶である。鼻と耳が大きく尖った形状になっているのが特徴で、アクセサリとして頭飾りと耳飾りをパーツとして付け、白い塗料で目、手、装束などを色づけしている。胴体左側の衣装を右肩に渡したひもでつづいている形状の装束は、同地域のこのタイプの人物像に散見される。左手にはマラカスを持ち、右手を口に当て指笛を吹いているようすを表している。背中の形状にテオティワカンで作られた人物像の形状に類似した要素が感じられることから、紀元後に作られたものと推察される。



9. 黄金の円盤

BC200-AD400 (カリマ文化) - AD400-1000 (キンバヤ文化)

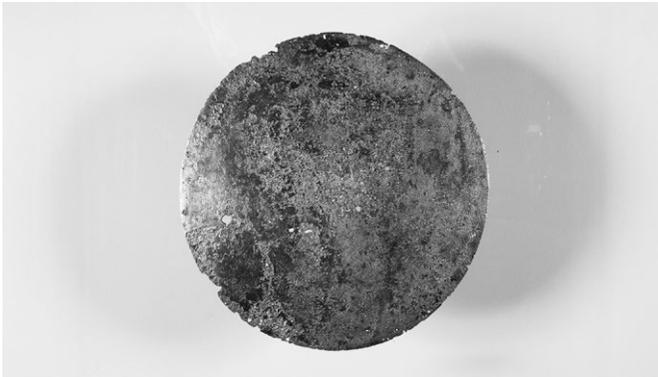
径21.9

264g

コロンビア

M2429 (金製円型胸飾り)

打ち伸ばし技法によって作られた黄金の円盤。紐を通す穴が一カ所あいており、ペンダントまたは胸飾りとして使われていたと考えられる。シンプルな形状から作成された時代の比定は難しい。コロンビアは金の産地として知られ、紀元前のカリマ文化に始まり、キンバヤ文化からタイロナ文化などへと続く先スペイン期のコロンビアの文化で、鑄造技術を取り入れながら脈々と黄金製品が作られてきた。スペイン人が入ってきた後、エル・ドラード伝説が生まれたのもこの地方である。



10. 黒陶鳩水注

AD850-1450

18.5×9.8×13.3

276g

ペルー、チムー文化

M2430 (黒陶鳩水注)

チムー王国で作られた鳩形単頸壺。頸部（首）の後ろ側に耳が1つ付いていて、実用的な形状をしている。チムー王国は9世紀からペルーの北部海岸地帯に存在した国で、15世紀にインカ帝国に滅ぼされた。黒色粘土で形成された土器を摩研した黒陶はチムー文化を代表する土器で、肉薄で軽く、本品のような鳥や動物、果物や野菜のような生活に関連したもの他、神話に題材を求めたモチーフなど、多彩な作品が残されている。



11. 黒陶蜥蜴耳壺

AD850-1450

14.7×11.3×16.8

450g

ペルー、チムー文化

M2430 (黒陶蜥蜴耳壺)

チムー王国で作られた黒陶蜥蜴耳単頸壺。両側面にトカゲを配し、それぞれの頭部が壺の耳となっている。チムー王国は9世紀からペルーの北部海岸地帯に存在した国で、15世紀にインカ帝国に滅ぼされた。黒色粘土で形成された土器を摩研した黒陶はチムー文化を代表する土器で、肉薄で軽く、本品のような鳥や動物、果物や野菜のような生活に関連したもの他、神話に題材を求めたモチーフなど、多彩な作品が残されている。



12. モチェ人物頭部壺

AD100-850

10.7×8.7×7.8

166g

ペルー、モチェ文化

M2902 (南米モチーカ顔壺)

人間の頭部を象った壺。頭頂部分に太めの頸部（首）があるのは、モチェ文化の壺における人物表現の特徴といえる。モチェ文化は西暦100年頃から850年頃にかけてペルー北部海岸地域で栄えた、いわゆるプレ・インカと呼ばれる文明の1つである。モチェ文化が栄えた時代の後半は、戦争の絶えない時代だったようで、ワカ・デ・モチェ遺跡の神殿から70ほどの生け贅の遺体が出土しており、モチェ文化では裸で後ろ手に縛られた戦士を象った壺も数多く作られていることから、本品も戦いに敗れ生け贅として斬首された捕虜の首を表していると思われる。



13. 樹皮布叩石

AD100-500 (?)

6.9×5.8×2.8

231g

コスタリカ (?)

M2905 (プレコロンビア線彫石)

樹皮を叩き伸ばして布や紙を作る際に使用する道具。四角い石の両面に並行に細い筋を彫り込み、その面で樹皮を叩く。石の側面にも太い溝があり、その溝に沿うように木の枝をまわして柄として取り付けていたと考えられる。同様の道具は古代から現代にかけて日本を含む世界各地で見ることができる。



14. 建造物のミニチュア

AD650-850

16.4×6.1×5.0

202g

グアテマラ、ペテン地方

M2906 (古代メキシコ神殿型十器)

マヤ低地地方の神殿ピラミッドのミニチュア土製品。ティカルで見られるような古典期後期（AD650-850）のペテン地方の建造物の特徴をよく表している。建造物の傾斜はきつく、正面の階段の両脇にはアルファルダと呼ばれる縦の構造物が配され、上部の神殿の入口のまぐさ石（リントル）とそれを支える柱（コルムナ）も表現されている。その上の屋根部分はおそらく茅葺きのような植物性の材料で作られていたものをモデルにしていると思われるが、古典期後期のペテン地方のピラミッド神殿では上部構造、特に屋根を大きく作る場所が特徴で、その重みを支える工夫がこのミニチュアの形状にも感じられる。マヤ低地地方では、この時期には人物像だけでなく、こうした建造物や建造物が集まった町、あるいは建造物内の人々の生活などを粘土で表現したミニチュアが多数作られた。



愛知県美術館研究紀要 第31号 木村定三コレクション編

2025年3月発行

編集・発行 愛知芸術文化センター 愛知県美術館

〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2

Tel: 052-971-5511 (代)

<https://www-art.aac.pref.aichi.jp/>

The logo for the Aichi Prefectural Museum of Art, featuring the lowercase letters 'aomaa' in a stylized font. Below the letters, the full name 'aichi prefectural museum of art' is written in a smaller, lowercase font.

制作 共生印刷株式会社

Bulletin of the Aichi Prefectural Museum of Art No.31

Part2 Studies of The Kimura Teizo collection

2025

Edited and Published : Aichi Prefectural Museum of Art

1-13-2 Higashisakura, Higashi-ku, Nagoya 461-8525 Japan

Tel: +81-52-971-5511

Printed : Kyosei Printing Co., Ltd.